

**【詳細版】****高校魅力化評価システムを活用した地域みらい留学校の教育的効果**

2026年2月16日

一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム  
多様な越境機会の推進による課題解決型人財育成事業  
市町村ネットワーク推進事務局**【要旨】****■地域みらい留学校の教育的効果の探索的分析報告（2022年～2024年）**

- 本報告書では、「高校魅力化評価システム」のアンケート調査データを用いて、地域みらい留学校と地域みらい留学先進校の3年間の推移を踏まえた特徴や、地域みらい留学入学生の特徴、地域みらい留学生と地元進学生の高校3年間の資質・能力の伸びについて分析を行った。
- また、コーディネーター配置の効果や小規模校と大規模校における「学習環境」と「自己認識」の差についても検証を行った。

**■地域みらい留学校では、地域に赴き多様な人と関わる中で、自己肯定感と非認知能力を育む**

- 地域みらい留学校の3年間の結果の推移では、地域をフィールドとした「学習活動」や、学校外の多様な大人と関わる「学習環境」に関して、全国を上回る肯定的回答割合が顕著に見られた。
- 地域みらい留学先進校では、挑戦を肯定する雰囲気や、生徒の意見が尊重される風土の中で、自己肯定感と地域への興味・関心を高め、主体性や地域貢献意欲を醸成する様子が伺えた。
- 地域みらい留学生に焦点を当てると、地域への関心が高い子たちが入学してくる傾向にあり、3年間の地域生活を通して、自分を客観的に理解する力や忍耐強さ、論理的思考力などを身に付け、地元進学生も地域みらい留学生に影響を受けながら、同様の非認知能力のほか、応用力や自己肯定感などを身に付けていることが分かった。

**■コーディネーターがより豊かな「学習活動」「学習環境」の提供に寄与している**

- コーディネーターを配置している学校では、配置していない学校と比較して、高校3年間の「学習活動」「学習環境」の肯定的回答割合の伸びが大きい傾向が確認された。
- コーディネーターは、特に地域の多様な人との関わりを増やす点に貢献していると言え、コーディネーターの存在が豊かな「学びの土壌」の提供に寄与しているとの示唆も得られた。

**■小規模校は大規模校と遜色ない学習環境の中で、大規模校以上に資質・能力を伸ばしている**

- 1学年の生徒数が120人以下の小規模校でも、121人以上の大規模校と同等の「学習環境」や、それを上回る資質・能力の変化が観測され、学校規模そのものが学習成果を一義的に規定するものではないことが示唆された。

分析・執筆責任：大野 晴香／編集・執筆：田中 りえ／コラム取材：森 泰紀

## 目次

1. はじめに
2. 高校魅力化とは
  - (1) 高校魅力化とは何か
  - (2) 高校魅力化を全国に広げる仕組み「地域みらい留学」
  - (3) 学校と地域の取り組みを支える組織診断ツール「高校魅力化評価システム」
  - (4) 「多様な越境機会の創出による地域課題解決型人財育成」への調査結果の活用
3. 分析結果
  - (1) 地域みらい留学校の特徴
  - (2) 地域みらい留学先進校の特徴
  - (3) 地域みらい留学入学生（高1生）の特徴
  - (4) 地域みらい留學生の特徴（高1→高3の変化）
  - (5) 地元進學生の特徴（高1→高3の変化）
  - (6) インプット（学習活動・環境）×アウトプット（自己認識など）の関係
  - (7) コーディネーター配置有無による学習活動・学習環境の変化（高1→高3）
  - (8) コーディネーター配置の効果
  - (9) 小規模校と大規模校の学習環境の比較
  - (10) 小規模校と大規模校の自己認識の変化比較（高1→高3）
4. 「多様な越境機会の創出による地域課題解決型人財育成事業」推進のためのロジックモデル
5. おわりに

## 1. はじめに

- ・ 地域・教育魅力化プラットフォーム（以下、「弊財団」とする）は、2017年度に三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社と協働し、魅力ある高校づくり（高校魅力化）がそこに通う生徒に与える効果・影響を可視化するためのツール「高校魅力化評価システム」を開発してから現在約8年が経過した。本システムは2018年度より島根県を中心に導入が開始され、2024年度時点で45都道府県367校に導入されるまでとなった。
- ・ しかし、2022年発行の「高校生の資質・能力を高める『学びの土壌』～島根県『高校魅力化評価システム』データ分析レポート～」<sup>1</sup>を最後に、本システムのデータを活用した分析ができておらず、地域みらい留学の教育的効果については、実践事例の共有にとどまり、定量的な検証が十分に進んでいなかった。
- ・ また近年、証拠に基づく政策立案（Evidence Based Policy Making(EBPM)）<sup>2</sup>に対する要請が高まる中、学校経営のPDCAサイクルの構築や探究学習の振り返りに本評価システムの結果が活用されるなど、教育政策や、学校教育等の教育実践の現場において、調査データに基づいた意思決定が進められてきている<sup>3</sup>。
- ・ しかし、調査データに基づいた意思決定が、教育政策や教育実践の現場全体に浸透しているとは言えず、本評価システム導入校においても、データは取得しているが活用しきれていない学校・自治体が数多く存在するのが実態である。
- ・ そこで、本評価システムのEBPMやPDCAサイクル推進への活用促進を目的に、地域みらい留学の教育的効果の特徴と、「学習環境」「学習活動」が「自己認識」「行動実績」「ウェルビーイング」とどのように関連しているかを探索的に明らかにしていきたい。
- ・ 従来の分析では、地域みらい留学の効果を学校単位で測定するに留まっていたが、本報告書では2022-2024年度の最新データを用いて、地域みらい留学生や地元進学生などの生徒単位で測定できている点が、過去からの発展要素として位置づけられる。

---

<sup>1</sup> [https://www.murc.jp/library/report/seiken\\_220310\\_2/](https://www.murc.jp/library/report/seiken_220310_2/)

<sup>2</sup> 内閣府 HP「内閣府におけるEBPMへの取り組み」(<https://www.cao.go.jp/others/kichou/ebpm/ebpm.html>, 2025年12月18日閲覧)によると、EBPMとは「政策の企画をその場限りのエピソードに頼るのではなく、政策目的を明確化したうえで合理的根拠（エビデンス）に基づくものとする」と定められている。

<sup>3</sup> 詳細は「学校での『高校魅力化評価システム』活用事例レポート～エビデンスと対話による施策・プロジェクトの振り返り(EDPM)に向けて～」([https://www.murc.jp/library/report/seiken\\_220310\\_3/](https://www.murc.jp/library/report/seiken_220310_3/)) 参照。

## 2. 高校魅力化とは

まず、「高校魅力化」および「地域みらい留学」誕生の背景から、取り組みの中で生まれた「高校魅力化評価システム」とその活用状況について振り返りたい。

### (1) 高校魅力化とは何か

- ・ 「高校魅力化」という言葉は、2008年に島根県立隠岐島前高等学校の後援会が、「隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会（魅力化の会）」へと名称変更したことにルーツがある。離島地域に唯一存在する高校が生徒数減少に直面し、高校存続、ひいては地域存続への強い危機感が高まる中で、地域社会が一丸となり、
  - 生徒にとって「行きたい」
  - 保護者にとって「行かせたい」
  - 地域住民にとって「活かしたい」
  - 教員にとって「赴任したい」

高校づくりを目指してきた取り組みである<sup>4</sup>。

- ・ この実践を原点に、高校魅力化は、地域社会とともに高校づくりを進めること、そして地域の将来的な担い手を育成することを目的とした取り組みとして、当初は島根県内の離島・中山間地域の小規模校を中心に展開されてきたが、現在では全国へと広がりを見せている。探究学習の高度化、コーディネーター<sup>5</sup>の配置、地域と連携したカリキュラム設計、また全国募集の実施など、取り組み内容も地域特性に応じて多様化している。
- ・ 弊財団は、設立以来、全国各地の高校・自治体・地域の実践者と協働しながら、高校魅力化が生徒の学びや成長、さらには地域との関係性にどのような影響を与えているのかを継続的に検討してきた。
- ・ 弊財団が全国の高校・自治体とともに進めてきた高校魅力化は、単なる教育内容の刷新にとどまらず、学校を地域社会に開くことを大きな特徴としている。地域住民、企業、NPO、自治体職員など、多様な大人が学びに関わることで、生徒は教室内に閉じた学習だけでなく、地域という実社会をフィールドとした実践的な学びを経験する。こうした環境の中で、生徒は問いを立て、行動し、失敗と試行錯誤を重ねながら学びを深めていく。
- ・ 弊財団では、このような地域と連動した学習環境こそが、これからの社会で求められる主体性、協働性、課題解決力、自己肯定感といった資質・能力の育成につながると考えている。

### (2) 高校魅力化を全国に広げる仕組み「地域みらい留学」

- ・ 高校魅力化の実践を背景として生まれたのが、「地域みらい留学」である。地域みらい留学は、全国の生徒が地域を越えて高校に進学することを可能にし、地域に新たな人の流れと多様な学びをもたらす仕組みである。
- ・ 開始当初は限られた地域・学校での取り組みであったが、現在では170を超える自治体・高等学校が参画し、地域みらい留學生の数も年間1000人規模と毎年増加している。
- ・ 弊財団は、学校・自治体への伴走支援、寮の整備・運営支援、短期体験プログラム（おためし地域留学）などを通じて、地域みらい留学の質的向上と持続的な拡充を支えている。

<sup>4</sup> 山内・岩本・田中、2015『未来を変えた島の学校』岩波書店

<sup>5</sup> 「学校と地域・社会をつなぐ 高校コーディネーターガイド」(<https://cn-miryokuka.jp/about/>, 2026年1月7日閲覧)

(3) 学校と地域の取り組みを支える組織診断ツール「高校魅力化評価システム」

- ・ 弊財団は、2017年度に三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社と協働で「高校魅力化評価システム」を開発し、全国各地の高校・自治体・地域の実践者と協働しながら、高校魅力化が生徒の学びや成長、さらには地域との関係性にどのような影響を与えているのかを可視化する取り組みを進めてきた。
- ・ 「高校魅力化評価システム」は、弊財団が高校魅力化および地域みらい留学の実践を支えるために開発した、学校の組織診断ツールである。本システムは、以下の特徴を有している。
  - 学校の教育活動を、生徒および関わる大人の視点から「見える化」する
  - 教育活動と生徒の育ちとの関係性を検討するためのデータを提供する
  - 多様な指標により、スクールポリシー等の達成状況を把握・管理できる
- ・ アンケート調査を通じて、「学校・地域における教育活動・学習環境」と「生徒の成長やウェルビーイング」を多面的に把握できる点に特徴があり、とりわけ、大人との関係性や学びの機会といった「学びの土壌」を定量的に捉えられる点に強みがある。
- ・ 2018年度の開発以降、全国の高等学校・高等専門学校に導入され、2025年度には約370校・約10万人の回答実績を有する。

(4) 「多様な越境機会の創出による地域課題解決型人財育成」への調査結果の活用

- ・ 高校魅力化評価システムは、2025年度～2027年度の地域未来交付金活用事業「多様な越境機会の創出による地域課題解決型人財育成事業」事業においても、成果の見える化を担う基盤として位置づけている。
- ・ 本事業では、山形県小国町を幹事とし、47自治体の離島・中山間地域等の小規模市町村が広域に連携し、地域や学校の枠を越えた越境的な学びの機会を創出することで、地域課題解決型人財の育成と、多層的な関係人口の創出を目指している。

弊財団は、アンケート調査を活用したデータの蓄積・分析を通じて、事業成果の可視化と改善を支援するとともに、学校・自治体の自走化や社会資源との連携につなげていく役割を担っている。

### 3. 分析結果

上記を踏まえ、「高校魅力化評価システム」を用いて、地域みらい留学の教育的効果について探索的な分析を進めていきたい。なお、本分析にかかる詳細な調査方法や調査対象については、「【概要版】高校魅力化評価システムを活用した地域みらい留学校の教育的効果」を参照いただきたい。

#### 【地域みらい留学の特徴】

##### (1) 地域みらい留学校の特徴

- ・ 図表 3-1 は、「学習活動」「学習環境」「自己認識」「行動実績」「ウェルビーイング」の領域別に、地域みらい留学校と全国平均の差異に着目し、地域みらい留学>全国の肯定的回答割合が高い上位3つの設問を、2022-2024 年度の3年分示している。差異は、両者の差である。
- ・ 2022 年度は全国 296 校 103,951 人・地域みらい留学校 43 校 6,272 人、2023 年度は全国 346 校 119,657 人・地域みらい留学校 60 校 8,097 人、2024 年度は全国 358 校 119,214 人・地域みらい留学校 74 校 9,325 人を対象に集計した。
- ・ 地域みらい留学校では、地域の魅力や課題を題材とした「学習活動」や、学校外の多様な人々と接点を持つ「学習環境」に関する領域において、全国平均を 20pt 近く上回っていることが確認された。
- ・ また、「行動実績」においても、地域行事やボランティア活動への参加、地域の大人との日常的な交流に関する設問で相対的に高い値が観測されており、学習活動と地域社会との関わりが、生徒の行動レベルの経験と関連していることが示唆される。
- ・ 「ウェルビーイング」領域では、生活に対する安心感や将来展望に関する設問において、全国平均をやや上回る肯定的回答割合が確認された。差は限定的であるものの、地域社会との継続的な関係性が、生徒の不安感解消や将来への明るい見通しと関連している可能性が考えられる。

図表 3-1 地域みらい留学校>全国平均の上位 3 項目

#### ■学習活動

##### 2022 年度

#	設問	差異
1	14.地域の魅力や資源について考える	+20.2pt
2	15.地域の課題の解決方法について考える	+15.8pt
3	6.学校外のいろんな人に話を聞きに行く	+13.1pt

##### 2023 年度

#	設問	差異
1	14.地域の魅力や資源について考える	+25.1pt
2	15.地域の課題の解決方法について考える	+18.2pt
3	9.活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	+16.0pt

##### 2024 年度

#	設問	差異
1	14.地域の魅力や資源について考える	+17.8pt
2	15.地域の課題の解決方法について考える	+16.6pt
3	6.学校外のいろんな人に話を聞きに行く	+15.0pt

## ■学習環境

## 2022 年度

#	設問	差異
1	29.地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	+18.3pt
2	32.自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	+10.7pt
3	19.地域から大切にされている雰囲気を感じる	+8.9pt

## 2023 年度

#	設問	差異
1	29.地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	+21.6pt
2	32.自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	+14.2pt
3	19.地域から大切にされている雰囲気を感じる	+8.3pt

## 2024 年度

#	設問	差異
1	29.地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	+18.7pt
2	32.自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	+13.4pt
3	30.人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	+7.1pt

## ■自己認識

## 2022 年度

#	設問	差異
1	61.地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる	+6.7pt
2	58.将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある	+0.2pt
3	60.住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	-0.6pt

## 2023 年度

#	設問	差異
1	61.地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる	+6.8pt
2	56.地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい	+2.3pt
3	59.地域で起きている課題と世界で起きている課題は、お互いに関連しあっていると感じる	+1.2pt

## 2024 年度

#	設問	差異
1	61.地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる	+6.3pt
2	56.地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい	+3.1pt
3	60.住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	+1.2pt

■行動実績

2022 年度

#	設問	差異
1	70.地域社会などでボランティア活動に参加した	+9.5pt
2	69.いま住んでいる地域の行事に参加した	+8.7pt
3	77.先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	+8.4pt

2023 年度

#	設問	差異
1	70.地域社会などでボランティア活動に参加した	+15.2pt
2	69.いま住んでいる地域の行事に参加した	+11.4pt
3	77.先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	+9.1pt

2024 年度

#	設問	差異
1	70.地域社会などでボランティア活動に参加した	+14.5pt
2	69.いま住んでいる地域の行事に参加した	+14.3pt
3	77.先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	+8.3pt

■ウェルビーイング

2022 年度

#	設問	差異
1	89.日本の将来は明るいと思う	+3.2pt
2	83.現在の日常生活に不安や心配事がない	+2.3pt
3	86.自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っている	+1.4pt

2023 年度

#	設問	差異
1	83.現在の日常生活に不安や心配事がない	+3.1pt
2	89.日本の将来は明るいと思う	+1.8pt
3	86.自分の将来についての見通し（将来こういう風でありたい）を持っている	+1.4pt

2024 年度

#	設問	差異
1	83.現在の日常生活に不安や心配事がない	+2.7pt
2	60.住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	+1.2pt
3	58.将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある	+1.2pt

注1) 4段階評価のうち上位2段階を肯定的な回答とみなし、全校平均肯定回答率を集計。なお、「ウェルビーイング」の満足度・幸福度に関する2設問は、11段階評価のうち上位4段階を肯定的な回答として集計（以下同様）。

注2) 全88質問項目のうち、「自己認識」「ウェルビーイング」どちらにも属する設問が3つ存在（以下同様）。

(2) 地域みらい留学先進校の特徴

- ・ 次に、(1)地域みらい留学校の特徴と同様の比較を、地域みらい留学校と、3年間の留学と単年留学の両方を実施する先進校との間で行い、その結果を図表3-2に示す。
- ・ 2022年度は地域みらい留学校43校6,272人・先進校7校806人、2023年度は地域みらい留学校60校8,097人・先進校8校1,131人、2024年度は地域みらい留学校74校9,325人・先進校8校1,050人を対象に集計した。
- ・ その結果、先進校では、地域課題を扱う探究的学習や、大人との対話を伴う「学習活動」に関する設問で、地域みらい留学校をさらに上回る肯定的回答割合が確認された。「学習環境」に関しては、挑戦を肯定する雰囲気や、生徒の意見が尊重される風土に関する設問で差が見られた。
- ・ これらの結果は、人的環境や学校文化が、「自己認識」に挙げられる生徒の主体性や地域への貢献意欲、「ウェルビーイング」に挙げられる地域愛へ影響を与えている可能性を示唆している。

図表3-2 先進校>地域みらい留学校の上位3項目

■学習活動

2022年度

#	設問	差異
1	9.活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	+13.8pt
2	15.地域の課題の解決方法について考える	+11.1pt
3	6.学校外のいろんな人に話を聞きに行く	+10.7pt

2023年度

#	設問	差異
1	15.地域の課題の解決方法について考える	+10.0pt
2	14.地域の魅力や資源について考える	+9.5pt
3	9.活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	+7.1pt

2024年度

#	設問	差異
1	14.地域の魅力や資源について考える	+9.3pt
2	9.活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	+8.5pt
3	6.学校外のいろんな人に話を聞きに行く	+7.8pt

## ■学習環境

## 2022 年度

#	設問	差異
1	36.生徒の意見が学校での意思決定に反映される雰囲気がある	+7.9pt
2	30.人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	+7.3pt
3	22.人と違うことが尊重される雰囲気がある	+7.2pt

## 2023 年度

#	設問	差異
1	29.地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	+8.3pt
2	31.お互いに問いかけあう機会がある	+8.2pt
3	19.地域から大切にされている雰囲気を感じる	+7.4pt

## 2024 年度

#	設問	差異
1	23.ありのままの自分が尊重される雰囲気がある	+6.6pt
2	31.お互いに問いかけあう機会がある	+6.3pt
3	33.目標や当事者意識を持って挑戦している人がある	+6.0pt

## ■自己認識

## 2022 年度

#	設問	差異
1	61.地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる	+7.6pt
2	39.現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	+3.8pt
3	54.一つ二つの立場だけでなく、できるだけ多くの立場から考えようとする	+3.1pt

## 2023 年度

#	設問	差異
1	38.家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	+7.3pt
2	57.私に関わることで、変えてほしい社会が少し変えられるかもしれない	+4.8pt
3	61.地域社会の魅力や課題について、自主的にテーマを設定し、フィールドワーク等を行いながら調べ、考える学習活動に対して、熱心に取り組んでいる	+4.7pt

## 2024 年度

#	設問	差異
1	62.地域や社会で起こっている問題やできごとに関心がある	+5.8pt
2	56.地域をよりよくするため、地域における問題に関わりたい	+4.9pt
3	39.現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	+4.6pt

■行動実績

2022 年度

#	設問	差異
1	77.先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	+6.9pt
2	72.自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた	+4.8pt
3	74.授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	+3.2pt

2023 年度

#	設問	差異
1	77.先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	+8.4pt
2	74.授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	+6.3pt
3	76.公式やきまりを習う時、その根拠を理解するように自分で考えたり調べたりした	+5.9pt

2024 年度

#	設問	差異
1	75.授業の内容について、「なぜそうなるのか」と疑問を持って、自分で考えたり調べたりした	+5.6pt
2	74.授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	+5.2pt
3	69.いま住んでいる地域の行事に参加した	+4.0pt

■ウェルビーイング

2022 年度

#	設問	差異
1	66.この学校に入ってよかったと思う	+3.5pt
2	88.この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	+0.6pt
3	58.将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある	-0.4pt

2023 年度

#	設問	差異
1	60.住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	+3.8pt
2	88.この地域を、将来暮らす場所としておすすめできる	+3.7pt
3	89.日本の将来は明るいと思う	+3.5pt

2024 年度

#	設問	差異
1	60.住んでいる地域の文化や暮らしの価値ある部分を、自らの手で未来に伝えていきたい	+3.1pt
2	82.普段のあなたの幸福度	+2.7pt
3	83.今の生活全般の満足度	+2.2pt

## ■コラム：事例紹介

### “生徒の変化を支えた「大人との関わり」から見えること”

高校と地域の協働に長く取り組む先進校では、挑戦を肯定する雰囲気や、生徒の声が尊重される風土が育まれている。その結果として、生徒の地域への関心や貢献意欲が高まっていることは、これまでの調査や評価からも確認されてきた。

では、その変化は、どのような大人との関わりを通じて生まれているのであろうか。

本コラムでは、広島県立大崎海星高等学校および高知県立嶺北高等学校へのインタビューをもとに、生徒の変容を後押ししている具体的な関係性や場のあり方を紹介する。

### 【広島県立大崎海星高等学校】

#### 生徒を伴走する大人も「関わる当事者」として

広島県立大崎海星高等学校では、総合的な探究の時間「大崎上島学<sup>6</sup>」において、1年次からマイプロジェクト<sup>7</sup>の考え方を取り入れている。

特徴的なのは、マイプロが生徒だけのものではない点である。関わる教職員やコーディネーターなどの教育関係者も、自ら地域に出てプロジェクトに取り組み、その姿を生徒に見せている。



#### 支援者ではなく「一人の挑戦者」として

プロジェクト支援や地域での試行錯誤を通じて、教職員やコーディネーターもまた、地域と向き合う一人の挑戦者となっている。大人が完璧な答えを示すのではなく、悩み、試し、楽しむ姿勢そのものが、生徒にとっての学びとなっている。

#### 日常の中で出会う「挑戦する大人」

学校での活動や島親との交流に加え、学校の近くにある地域住民運営のカフェが、生徒と地域をつなぐ場として機能している。「学校」「寮」「カフェ」が緩やかにつながることで、生徒は日常の延長線上で地域の大人と出会っている。

#### 大人が「面白い」ことの力

地域活動が継続している背景には、「やってあげる／やってもらう」という関係ではなく、大人も生徒も「面白い」と感じながら関わっていることがある。大人が本気で楽しむ姿に触れることで、生徒も活動を自分事として受け取り、主体的に関わる循環が生まれている。

<sup>6</sup> 地域みらい留学「広島県立大崎海星高等学校」(<https://c-mirai.jp/schools/e2f1367c-282f-4995-9021-c449d0f2854d>, 2026年1月7日閲覧)

<sup>7</sup> 「全国高校生マイプロジェクト」(<https://myprojects.jp/about/>, 2026年1月7日閲覧)

## 【高知県立嶺北高等学校】

### 社会との接点が生徒の行動を引き出す

高知県立嶺北高等学校では、総合的な探究の時間を軸に、自治体主導で配置されたコーディネーターが、生徒と地域をつなぐ役割を担っている。生徒は、学校での学びを起点にしながら、社会との接点を持ち、探究を深めていく環境の中に置かれている。



### 総合的な探究の時間における社会との出会い

2年次には、各自が設定した探究テーマについて、地域事業者約30社を前に「1分間ピッチ（プレゼンテーション）」を実施している。事業者からの問いや反応を受けることで、生徒は自らの探究が社会とつながっていることを実感しやすくなっている。

### 生活の中で関係を築く「嶺親（みねおや）の会」

約50世帯が加盟する「嶺親の会」を通じて、寮生は地域の家庭と継続的な関係を築いている。入学後の出会いをきっかけに、部活動の大会への送迎や家庭料理の振る舞いなど、家族のような交流が生まれている。

### 学校と地域を繋ぐコーディネーターの役割

地域事業者や嶺親などのこうした多様な大人との接点は、自治体が配置したコーディネーターによって支えられている。コーディネーターは、生徒ファーストの視点で一人ひとりの関心や状況を踏まえながら、学校での学びと地域での経験が切れ目なくつながるよう関係性の調整を行っている。

例えば、生徒から「イベントをやりたい」という声が上がった際には、大人が主導するのではなく、時間や場を整えたうえで、大人が手出しをせず「3時間あげるし、好きなことしようや」と裁量を委ねるなど、「生徒が主役」であるための余白を意図的に作り出している。現場では「大人がやり過ぎないことで、生徒が自分で考え、動き出すようになる」という声も聞かれた。

### 地域外・世界への視野の拡大

地域内にとどまらない学びの機会も、高知県立嶺北高等学校の特徴の一つである。セーシェル共和国への研修や外務省職員との交流など、地域外のロールモデルとつながる機会が設けられており、生徒が世界へと視野を広げるきっかけとなっている。こうした機会は、学校や自治体、これまで関わってきた多様な関係者との連携の中で育まれてきたものであり、コーディネーターは、そのネットワークを生徒の関心や成長段階に応じて適切につないでいる。

※写真はいずれも地域みらい留学HPの学校紹介ページより引用

## まとめ

両校の事例からは、生徒の変化を支えている大人との関わり方として、地域を学びのフィールドとし、多様な大人と日常的に関わる環境が設計されていることが見えてきた。

共通するのは、大人が単なる「指導者」としてではなく、「共に地域を楽しむ存在」や「可能性を信じて任せる伴走者」として、生徒と関わっている点である。

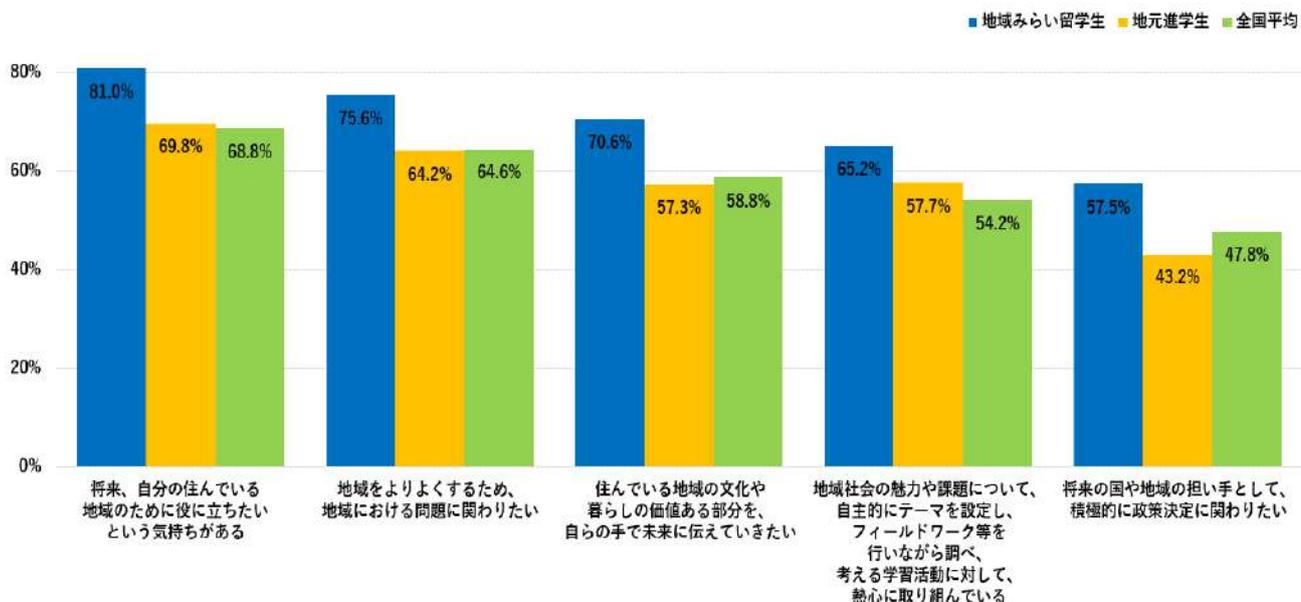
こうした関わりの中で、生徒は地域や社会と接点を持ちながら、自ら考え、動き出す経験を重ねている。また、コーディネーターが学校と地域のハブとなることで、多様な人との関係が単発的な体験にとどまらず、学びのプロセスとして継続している点も、共通する特徴である。

これらの事例は、地域を舞台とした学習活動や、多様な大人と関わる学習環境が、生徒の主体的な行動を支える重要な要素であることを示唆している。

### (3) 地域みらい留学入学生（高1生）の特徴

- ・ 次に、地域みらい留学校の特徴を生徒単位で見たい。
- ・ 図表 3-3 は、2022 年度高 1 生を対象に、地域みらい留学生と全国平均の「自己認識」の差異に着目し、地域みらい留学生 > 全国平均の肯定的な回答割合が高い上位 5 つの設問を、地元進学生も交えて比較したグラフである。
- ・ 地域への関心や貢献意欲に関する設問で、地域みらい留学生の肯定的回答割合が高い傾向が見られ、これは地域みらい留学を選択する生徒の志向性を反映していると考えられる。

図表 3-3 地域みらい留学入学生（高1生）の特徴



注1) 地域みらい留学生は高校の所在地が中学と異なる都道府県にある学生、地元進学生は中学と高校の所在地が同じ都道府県にある学生として定義（以下同様）。

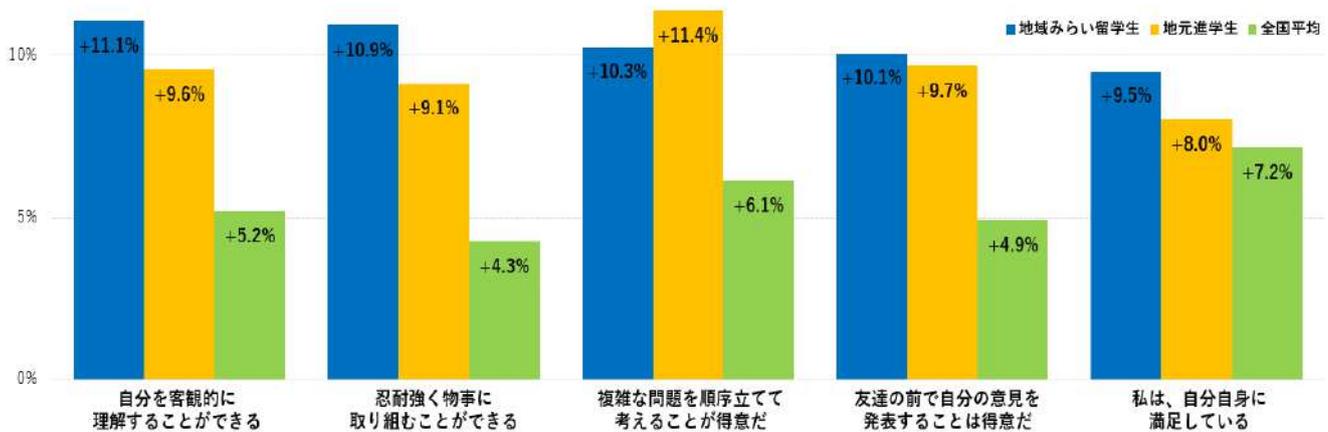
注2) 初期設定が任意となっている項目も含めて集計。

注3) 地域みらい留学生は 221 人、地元進学生は 1,549 人、全国は 24,911 人を対象に集計。

#### (4) 地域みらい留学生の特徴（高1→高3の変化）

- ・ さらに、高1から高3にかけての変化量（伸び）<sup>8</sup>を比較すると図表3-4の通りになる。
- ・ 「自己認識」に関する地域みらい留学生>全国平均の上位5つの設問を提示しており、自己を客観視する力、論理的思考力、粘り強さなどの設問で、相対的に大きな肯定回答割合の伸びが観測された。
- ・ 同様の傾向は地元進学生にも確認されており、地域みらい留学生の存在を含む学習環境が、学校全体の学びに影響を与えている可能性も考えられる。

図表 3-4 地域みらい留学生の特徴（高1→高3の自己認識の伸び）



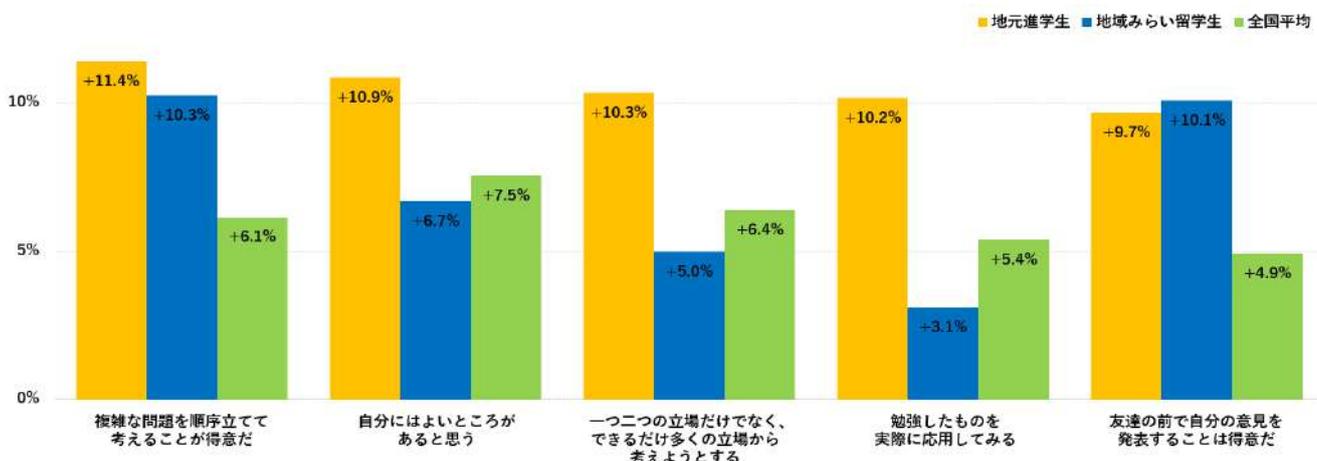
注1) 初期設定が任意となっている項目も含めて集計。

注2) 地域みらい留学生は2022年度高1生221人・2024年度高3生213人、地元進学生は2022年度高1生1,549人・2024年度高3生1,581人、全国は2022年度高1生24,911人・2024年度高3生22,909人を対象に集計。

#### (5) 地元進学生の特徴（高1→高3の変化）

- ・ (4)地域みらい留学生の特徴（高1→高3の変化）と同様の比較を地元進学生で行った結果が、図表3-5である。
- ・ 一部(4)地域みらい留学生の特徴（高1→高3の変化）と重複する設問もあるが、自己肯定感や応用力に関する設問で大きな伸びが測定されている点が特徴として挙げられる。

図表 3-5 地元進学生の特徴（高1→高3の自己認識の伸び）



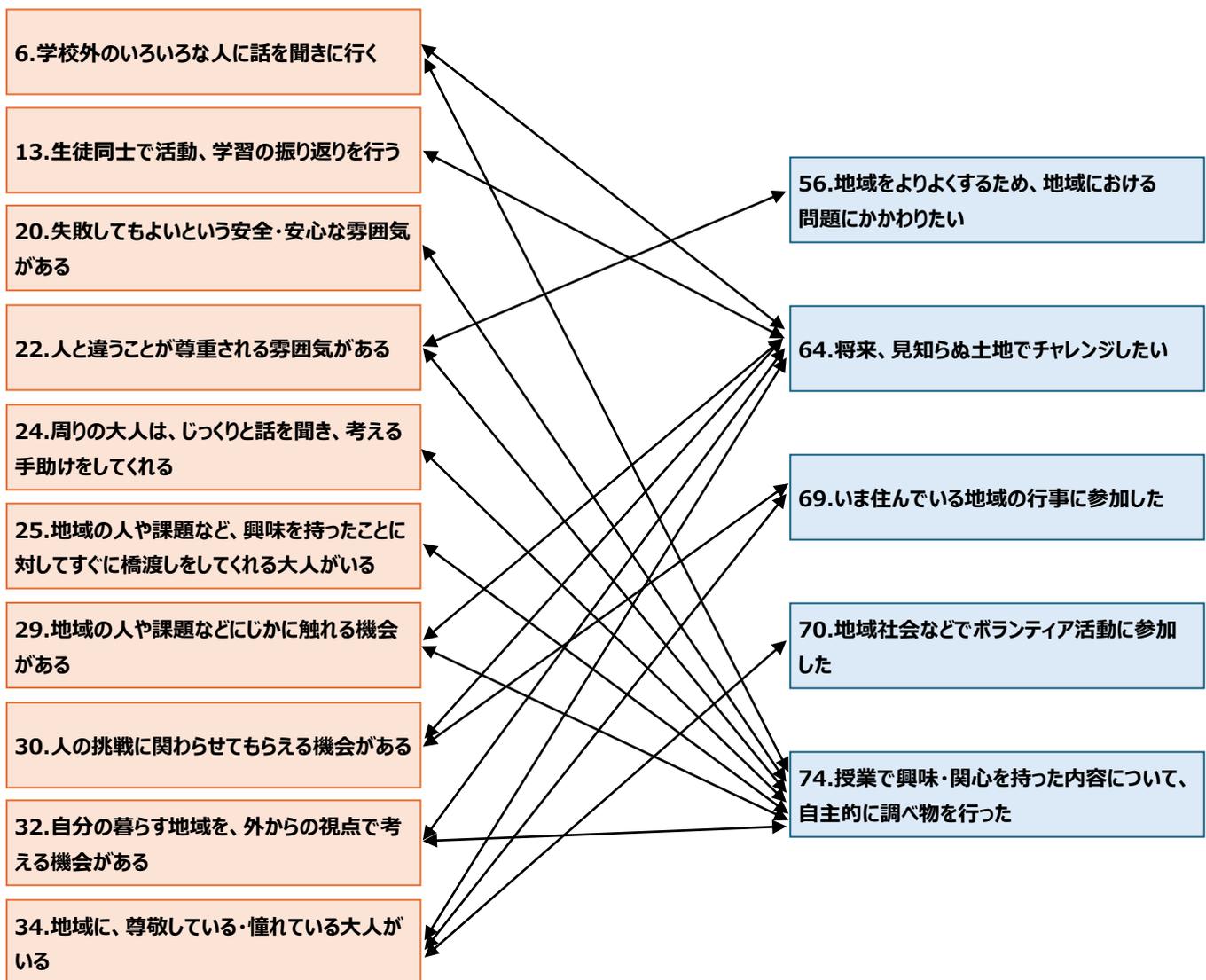
注1) 図表3-4と同様に集計。

<sup>8</sup> 生徒個人ではなく、学年集団間の平均値の差を伸びとして集計（以下同様）。

(6) インプット（学習活動・環境）×アウトプット（自己認識など）の関係

- ・ ここまで、先進校を含めた地域みらい留学校や地域みらい留学生、地元進学生の特徴を見てきたが、どのような学習活動・環境を整備すれば、上記のような生徒が育つのか。
- ・ 本節では、「学習活動」「学習環境」をインプット、「自己認識」「行動実績」「ウェルビーイング」をアウトプットと捉え、両者の相関を検討した。
- ・ その結果、(1)地域みらい留学校の特徴や(2)地域みらい留学先進校の特徴で見た、地域の人や課題と直接かかわる機会、挑戦を肯定する雰囲気、大人が生徒の志向を支援する環境に関する設問が、アウトプット指標と相対的に高い相関を示した。
- ・ これらの結果は、心理的安全性や人的ネットワークの存在が、生徒の主体性や行動実績と関連している可能性を示唆するものである。ただし、これらは相関であり、因果関係を示すものではない点に留意が必要である。自校の実態と照らし合わせながら確からしさを検討いただき、学習活動や学習環境を整備する際の参考としていただければ幸いである。

図表 3-6 インプット×アウトプットの相関



注1) 設問は初期設定が任意となっている項目を除いて集計。

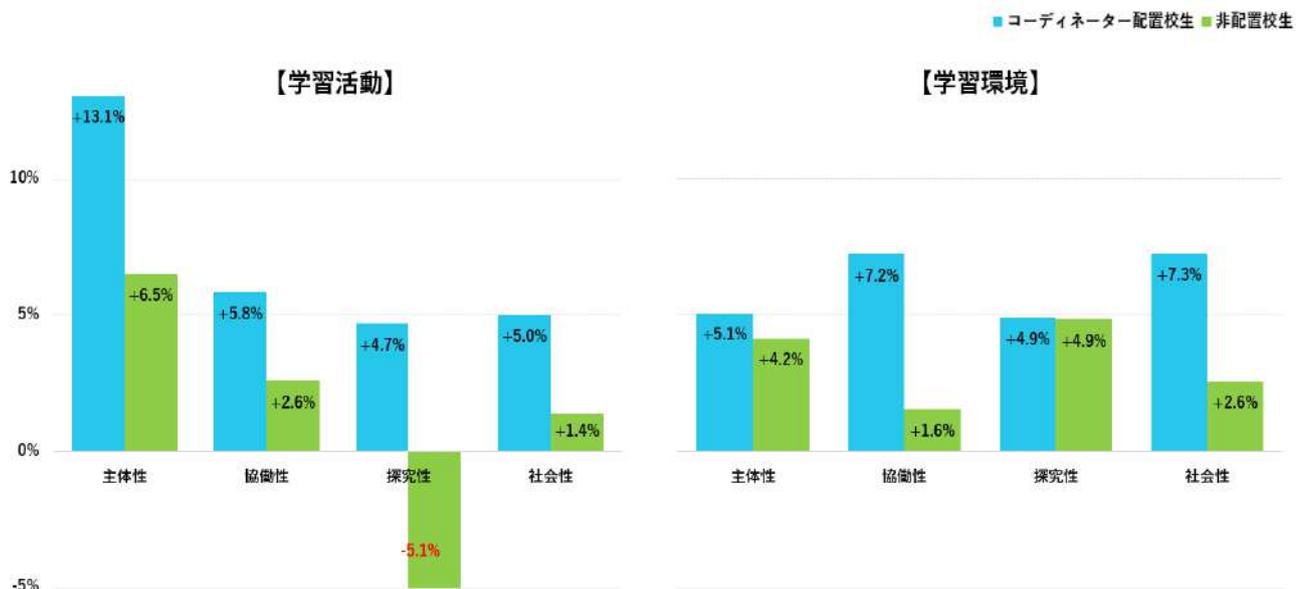
注2) 2024年度・2025年度（11月29日時点）の高校魅力化評価システム回答全データを学校毎に集計し、全国と先進校別にインプット×アウトプットの全項目で相関係数を算出。年間平均相関係数を比較し、先進校0.6以上かつ先進校>地域みらい留学校0.2以上のうち、アウトプットの肯定回答割合の伸びが大きい上位5項目（2024年度時点）を記載。

**【コーディネーターの存在意義】**

**(7) 学習活動・学習環境の変化（高1→高3）**

- ・ 学習活動・環境を整備する方法は様々あるが、その一つに学校と地域を媒介する役割を担う「コーディネーター」を配置することが挙げられる。本節ではその効果を捉えるべく、コーディネーターの配置有無に着目し、「学習活動」「学習環境」の変化を中心に分析を行った。
- ・ 図表3-7は、高1から高3にかけて「学習活動」「学習環境」に対する肯定的回答割合の変化量（伸び）を表している。コーディネーターを配置している学校（以下、「コーディネーター配置校」とする）は配置していない学校（以下、「非配置校」とする）と比較して、どちらの領域でも高校3年間を通じた肯定的回答割合の伸びが大きい傾向が確認された。
- ・ 実際、探究授業の一環で行う地域の就業体験や、地域・学校・行政を結び、生徒の活発な地域活動をサポートする地域活動拠点の運営などはコーディネーターがいなければ実現し得なかったとの教職員の声もヒアリング調査では聞かれており、地域と密接に連携した学習活動の提供や教員負担の軽減において、コーディネーターは一翼を担っていると言える。

**図表 3-7 コーディネーター配置有無による高1→高3の学習面の変化**



注1) 2024年度時点でコーディネーターが配置されている高校をコーディネーター配置校と定義。

注2) コーディネーター配置校生（30校）は2022年度高1生1,389人・2024年度高3生1,329人、非配置校生（176校）は2022年度高1生23,522人・2024年度高3年21,580人を対象に集計。

(8) コーディネーター配置の効果

- ・ 「学習活動」「学習環境」「自己認識」「行動実績」「ウェルビーイング」の領域別に高校3年間の変化量（伸び）に着目し、コーディネーター配置校>非配置校の上位3つの設問を図表3-8に示した。
- ・ 地域の人々や課題と直接関わる機会や、人の挑戦に関与する機会に関する設問で顕著な差が見られ、コーディネーターが地域資源と学校教育を接続することで、生徒の学習機会の幅を広げている可能性が示唆された。
- ・ また、「自己認識」や「ウェルビーイング」に関する設問においても、コーディネーター配置校は相対的に高い伸びを示しており、人的支援体制の存在が、生徒の学習経験の質や満足度・幸福度の高まりに影響を与えている可能性も見て取れる。

図表 3-8 コーディネーター配置校>非配置校の伸び上位3項目

■学習活動

#	設問	差異
1	12.活動、学習のまとめと発表する	+12.7pt
2	11.話し合った内容をまとめる	+9.9pt
3	9.活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	+9.9pt

■学習環境

#	設問	差異
1	30.人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	+8.2pt
2	29.地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	+6.4pt
3	27.自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	+5.4pt

■自己認識

#	設問	差異
1	50.友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	+8.3pt
2	41.複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	+7.7pt
3	47.忍耐強く物事に取り組むことができる	+6.5pt

■行動実績

#	設問	差異
1	69.いま住んでいる地域の行事に参加した	+7.8pt
2	74.授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	+5.6pt
3	70.地域社会などでボランティア活動に参加した	+5.2pt

■ウェルビーイング

#	設問	差異
1	81.今の生活全般の満足度	+6.2pt
2	82.普段のあなたの幸福度	+4.4pt
3	83.現在の日常生活に不安や心配事がない	+4.2pt

注1) 初期設定が任意となっている項目も含めて集計。

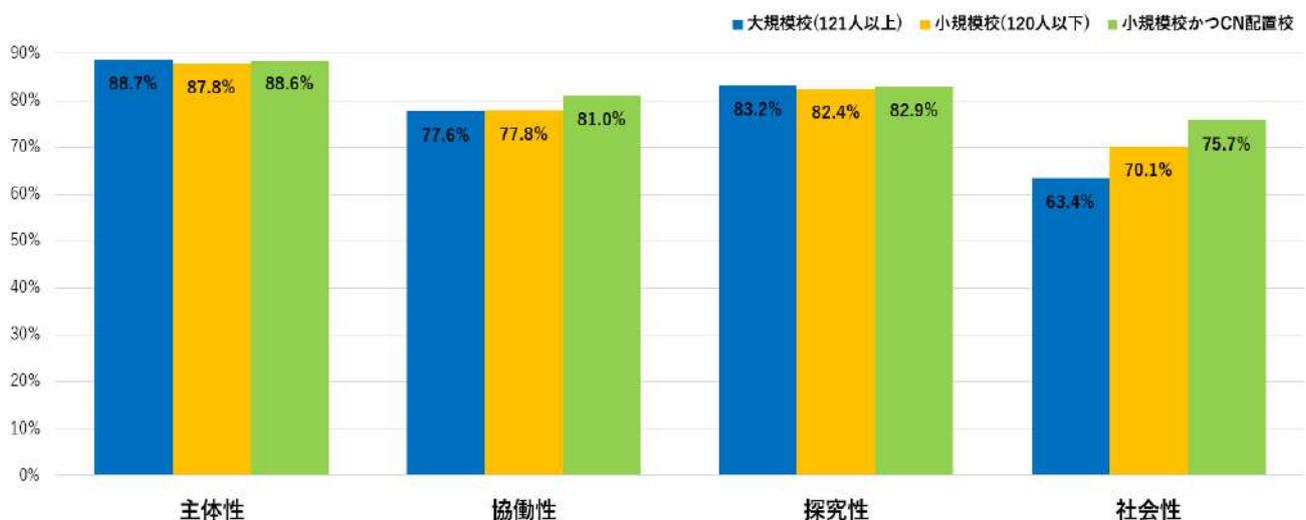
注2) 図表3-7と同様の定義・生徒を対象に集計。

## 【小規模校と大規模校の差異】

### (9) 学習環境の比較

- ・ 東京一極集中や少子化に伴う生徒減少、および地方自治体の財政難を背景に、高校の統廃合が進んでいるが、小規模校は大規模校と比べて多様性が失われるなど、学習環境面で不足があるか。
- ・ 1学年の生徒数が121人以上の学校を大規模校、120人以下を小規模校とみなし、コーディネーターを配置している小規模校も交え、「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の観点で肯定的回答割合を比較したのが図表3-9である。
- ・ いずれの観点でも大規模校と小規模校に大きな差は認められず、小規模校でも大規模校と遜色ない学習環境が用意されていることが分かった。また、コーディネーターを配置している小規模校は、「社会性」の観点で突出しており、コーディネーターの存在が、地域の人々や課題と直接関わる機会の創出に貢献していることがここでも確認できた。

図表 3-9 大規模校と小規模校における学習環境の比較



注1) 「学習環境」にまつわる設問を対象に、初期設定が任意となっている項目も含めて集計。

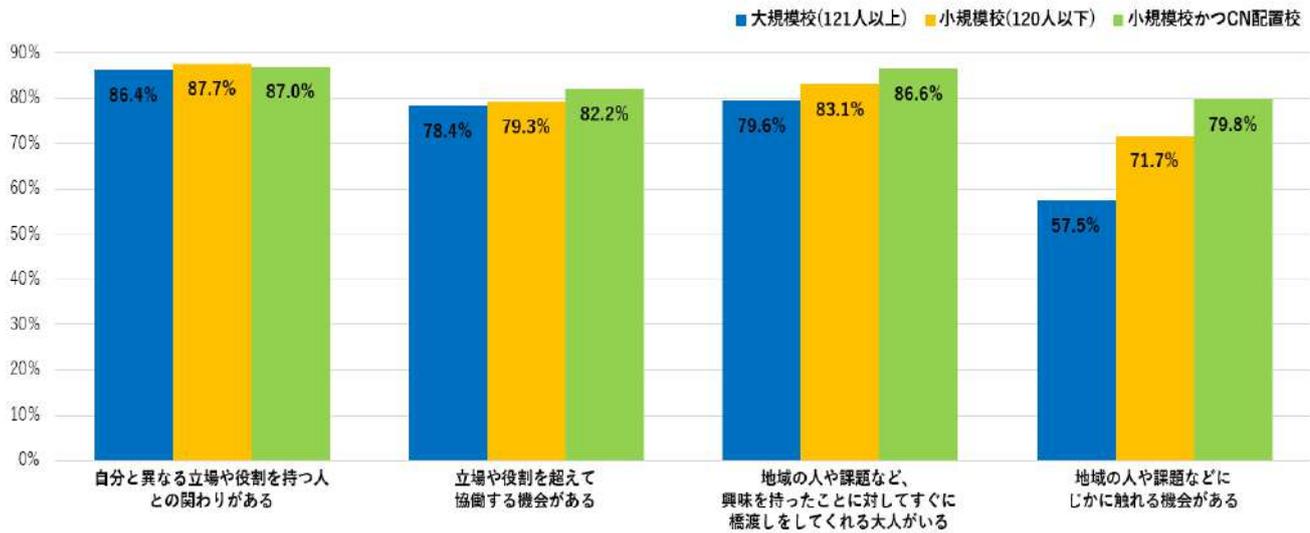
注2) 2024年度全校生徒を対象に集計。高1時点の生徒数を基に学校規模を判断し、大規模校は88校51,225人、小規模校は104校17,669人、うち小規模校かつコーディネーター配置校は29校3,872人が対象。

- ・ 「多様な人間関係の中で得られる学びを踏まえれば、一定の生徒数の規模を確保した学びを提供することが必要」<sup>9</sup>との国の声もあるが、一定の生徒数確保が多様な人間関係を構築する上での必須要件なのか。高校魅力化評価システムの設問のうち、「多様な人間関係」を象徴する設問を選定し、その肯定的回答割合を比較したのが図表3-10である。
- ・ 左2つの設問は**学校内**での多様な学び、右2つの設問は**学校外**での多様な学びを表現していると言えるが、いずれの設問でも小規模校は大規模校を上回っており、小規模校でも学校内外問わず多様な人間関係が構築されていることが分かる。
- ・ 以上の結果は、学校規模そのものよりも、学校内外における人的関係性や学習機会の設計が、学習環境の充実度と関連している可能性を示唆している。

<sup>9</sup> 文部科学省「高等学校教育改革推進基金の創設」資料（2025年11月28日発行）より抜粋。

[https://www.mext.go.jp/content/20251128-mxt\\_koukou01-000046079\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20251128-mxt_koukou01-000046079_02.pdf)

図表 3-10 大規模校と小規模校の多様な人間関係の充実度合い

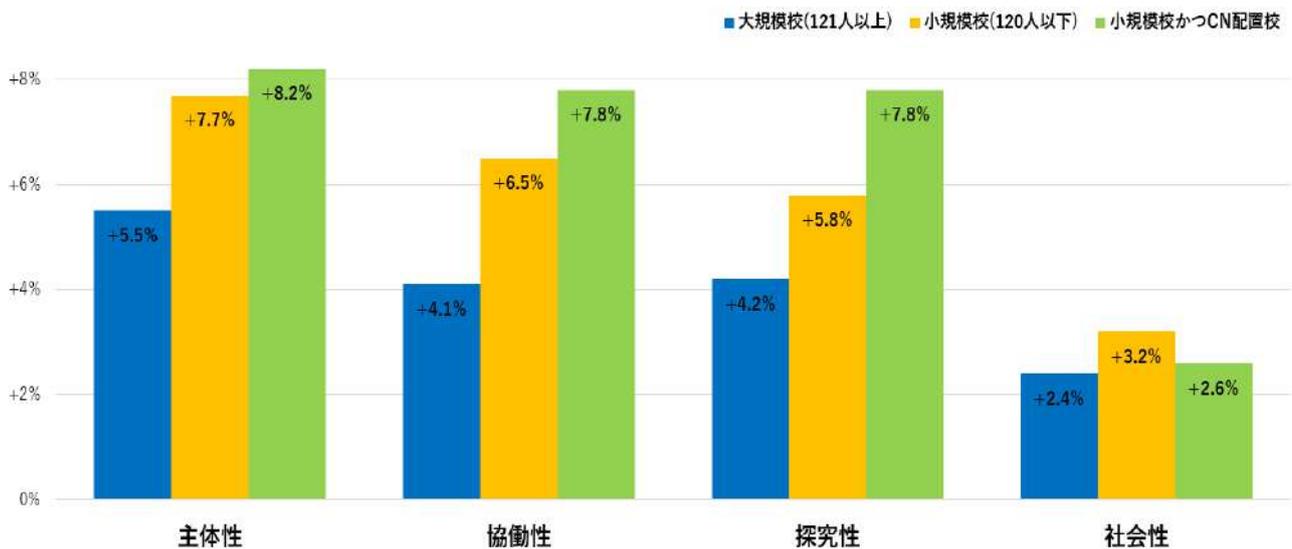


注1) 図表 3-9 と同様の生徒を対象に集計。

### (10) 自己認識の変化比較 (高1→高3)

- 学校規模によって、資質・能力の伸びに差異が生じるかを検証したのが図表 3-11 である。「自己認識」に関する設問を対象に、高1から高3の肯定的回答割合の変化量(伸び)を比較したが、小規模校では大規模校を上回る肯定的回答割合の伸びが観測されている。

図表 3-11 大規模校と小規模校の高校3年間での自己認識の伸び比較

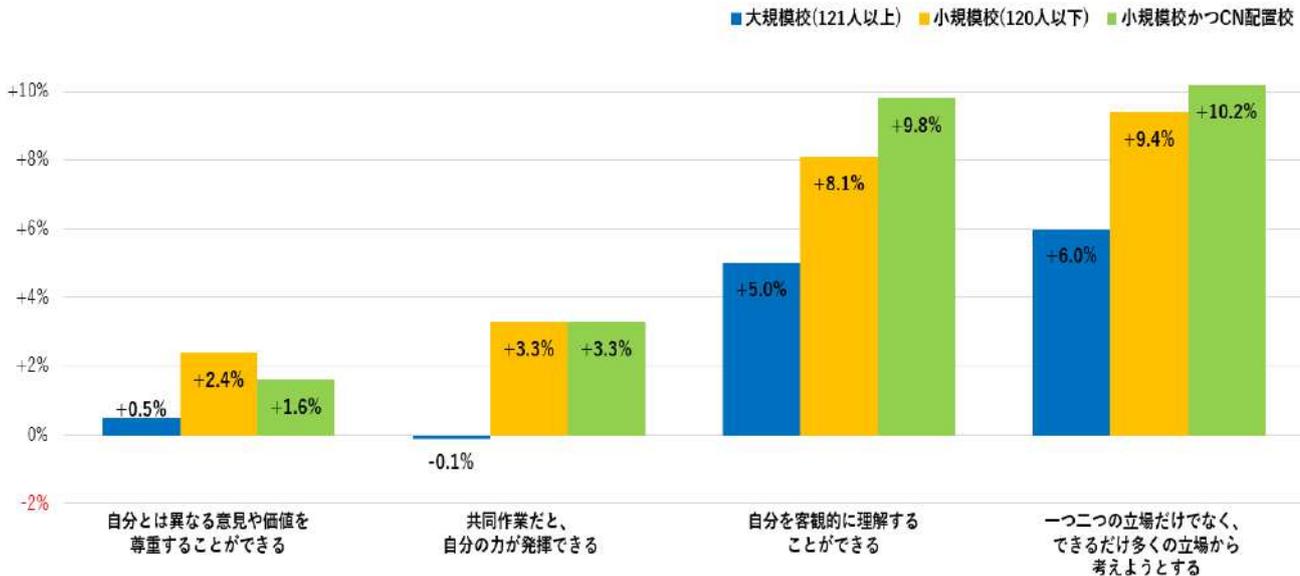


注1) 初期設定が任意となっている項目も含めて集計。

注2) 図表 3-9 と同様の生徒を対象に集計。

- ・ 多様な人間関係の中に身を置くことで、共同作業を行う機会が生まれ、他者の立場を尊重する態度や自らを客観的に捉える力、さらには多面的に物事を考える姿勢が養われると考えられるが、関連する設問の肯定的な回答割合の伸びを図表 3-12 に示した。
- ・ いずれの設問でも小規模校の伸びが相対的に大きく、生徒数が限られている環境でも、地域社会との接続を通じた多様な人間関係や活動などが、生徒の資質・能力の形成に寄与する可能性があることを示している。

図表 3-12 大規模校と小規模校の高校 3 年間で伸びる資質・能力比較

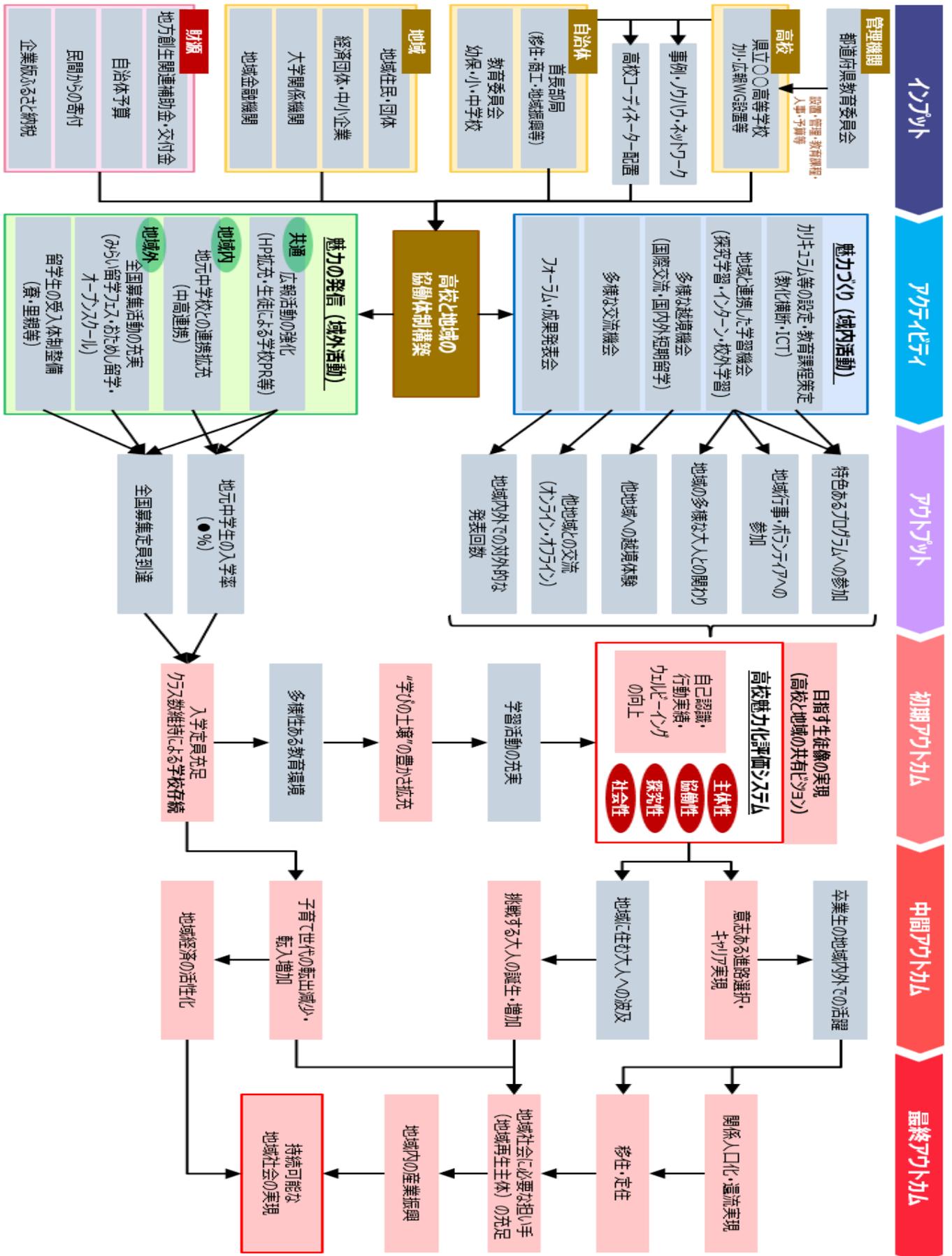


注1) 図表 3-9 と同様の生徒を対象に集計。

#### 4. 「多様な越境機会の創出による地域課題解決型人財育成事業」推進のためのロジックモデル

- ・ 最後に、地域未来交付金・地域未来推進型（旧新しい地方経済・生活環境創生交付金）を活用し実施している「多様な越境機会の創出による地域課題解決型人財育成事業」推進のためのロジックモデルを提示する。
- ・ 中間アウトカム以降は、各地域が掲げる目指す地域像により差異が生じる可能性があるが、インプットにヒト（主体）・カネ（財源）が入り、それらを基に地域内外でのアクティビティが行われ、初期アウトカムに示される「目指す生徒像の実現」や「入学定員充足」のためのアウトプットが設定されるという流れは同じであろう。
- ・ すでに各学校や自治体にてロジックモデルを作成されていると思われるが、作成に課題を感じている場合や、ロジックモデル更新時の参考として活用いただければ幸いである。
- ・ また、本モデルは、多様な越境機会の創出を起点として、地域課題解決型人財の育成と地域の発展を両立させる構造の可視化を目的としている。地域人財に関する施策や投資と地域戦略を接続する共通フレームワークとして活用し、各地域と対話を重ねながら、持続可能な地域循環の形成に向けた取り組みを共に推進していきたい。

図表 3-13 多様な越境機会の推進を通じた地域人財育成モデル



## 5. おわりに

- ・ 以上、高校魅力化評価システムの結果を基にした、地域みらい留学および関連する教育政策や教育実践の特徴を探索的に分析してきた。
- ・ その結果、地域と接続した「学習活動」や、多様な大人との関わりを含む「学習環境」を有する学校では、生徒の主体性や地域への貢献意欲、地域活動への参加に関する肯定的回答割合が相対的に高い傾向が示された。また、コーディネーターを配置している学校や、学校外との接点を積極的に設計している学校では、学習活動・環境の充実と関連する指標が高い値を示したことから、制度的・人的要因が学習経験の質と関係している可能性が見て取れた。
- ・ これらの結果は、地域みらい留学が生徒募集にとどまらず、学校と地域の関係性を再構築する教育政策や教育実践として機能している可能性を示すものである。
- ・ なお、本調査にはいくつかの制約が存在する。第一に、本分析は自己回答式アンケートに基づくものであるため、生徒の主観的認識を反映した結果である点に留意が必要である。第二に、高1から高3の伸びは、同一個人を追跡したパネル分析ではなく、学年集団間の比較のため、成長過程を直接捉えたものではない。第三に、相関分析に基づく結果は、変数間の関連性を示すものであり、因果関係を直接示すものではない。
- ・ これらの点を踏まえ、本報告書の結果は、地域みらい留学の教育的効果を断定するものではなく、今後の検証に向けた仮説生成の基礎資料として位置づけられるべきである。
- ・ 今後の課題として、縦断的なデータ収集による生徒単位での変化の把握、ならびに卒業後の進路や社会的活動との関連を検討することが挙げられる。特に、高校在学中の学習環境や経験が、卒業後の進学や就業、地域との関わり方にどのように影響しているのかを明らかにすることは、教育政策および地域政策の観点からも重要である。質的調査との組み合わせにより、定量データでは捉えきれない学習過程や意味形成の側面を補完することと併せ、今後検証していきたい。
- ・ 最近では、高校魅力化評価システムの結果の教育現場での活用が一部で進んでいる。例えば、評価システム担当者（魅力化担当や教務担当）が、生徒の成長度合いや「この学校を中学生におすすめてできる」などのKPIになりやすい設問の数値を追い、総合的な分析結果と対応方針と併せて、年度末の学校運営協議会にて学校の教育活動の成果として学校内外の協力者に共有している事例がある。活用事例は今後もヒアリングさせていただき、改めて共有したい。
- ・ 本報告書が、地域みらい留学および高校魅力化に取り組む学校・自治体にとって、教育政策や教育実践を検討する際の一助になるとともに、PDCA サイクル構築と EBPM 推進のための基礎資料として活用されることを期待する。
- ・ なお、本報告書作成にあたり、北海道大空高等学校、岡山県立和気閑谷高等学校、島根県立島根中央高等学校、広島県立大崎海星高等学校、高知県立嶺北高等学校へヒアリングをさせていただいた。ヒアリングにご協力いただいた学校および自治体の皆さまには、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

本件に関するお問い合わせ

一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム（担当：田中・鈴木）

〒690-0842 島根県松江市東本町二丁目 25-6 みらい BASE 2 階

TEL：0852-61-8866 メール：[network@c-platform.or.jp](mailto:network@c-platform.or.jp)

※本レポートの内容について、無断での転載・転用はご遠慮ください。  
転載・転用を希望される場合は、事前にご相談をお願いいたします。